

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 49 》

慢性C型肝炎患者を対象とした画期的な新薬の治験が、県立中央病院で行われている。治験とは、国から新薬の認可を受けるため、人に投与して有効性及び安全性を調べる臨床試験のこと。小俣政男理事長は「新しい医学がここで始まる」と期待。医療の質向上を目指し、新薬の開発に貢献している。

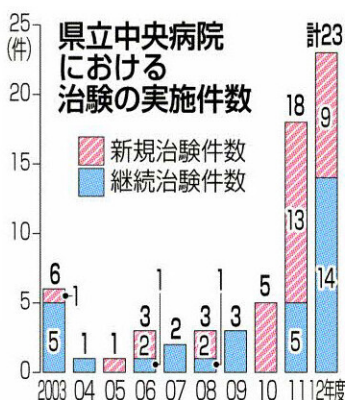
治験は国が定めるルール（GCP）に基づいて実施。主に健康な成人を対象に薬が体内にどのように吸収され排出されていくかを調べる「第1相」、少数の患者を対象に効果的な量や投与期間などを調べる「第2相」、最後に効果目や副作用を多くの患者で

画期的な新薬開発目指す

調べる「第3相」と、3段階に分けて行われる。

県立中央病院は、東大で治験管理センター長などを務めた小俣理事長のもと、2010年度から治験の体制を整備。本年度、治験の円滑な実施と関連部署との連携強化を図るため、臨床試験管理室を

立ち上げた。CRC（治験コーディネーター）6人が常駐し、患者への詳しい説明などを行っている。



同病院でスタートした「数カ月飲み薬で、すべてのタイプのC型肝炎ウイルスの駆除可能」な治験も含まれる。認可の手続きなどがスムーズに進めば「再来年には広く使えるよ



新薬について説明する小俣政男理事長（中央）と三枝美奈子さん（右）
 甲府・県立中央病院

同室の立ち上げに尽力してきた三枝美奈子さん（薬剤部）によると、治験の実施件数は10年度以降飛躍的に伸び、現在は19件。内科、外科、整形外科、皮膚科など複数の診療科にわたり、特にC型肝炎をはじめとする消化器系疾患に対する治験に積極的に取り組んでいる。

中には日本で初めて

小俣理事長は「安全性が高い最新の治療をいち早く受けられる」と治験参加の意義を説明。「よりよい薬を1日でも早く患者さんに届けられるよう医療の質向上に努めた」として診療とともに力を注ぐ考えだ。第2、4木曜日に掲載します